



三島カルチャーをつくる人びと

29



三島市立公園楽寿園

主任技士 野田政美 氏

プロフィール

昭和 57 (1982) 年三島市役所入庁。以来 40 年以上にわたって楽寿園の管理に携わる。三島の秋の風物詩「菊まつり」の盆景制作を、平成5年から現在まで担当。

職員みんなで作り上げる三島が誇る菊盆景

今年開園70周年を迎える楽寿園。秋を彩る恒例の「菊まつり」も70回を数えます。その中でも、目玉企画として多くの人が楽しみにしているのが「菊の盆景」ではないでしょうか。この制作に、初回から携わってこられた楽寿園の技士、野田政美さんにお話を伺いました。

楽寿園と同じ歴史をもつ東海最大規模の菊まつり

昭和27年(1952)の楽寿園開園の年から、今まで毎年行われています。昔から三島は菊づくりが盛んで、愛好者が多い町です。菊まつりと同時開催の「東海菊花大会」は、愛好者の「秋麗会」の皆さんによって行われています。そのため、楽寿園が開園の際この場所で菊まつりをやるという機運が高まり始まりました。当初は小田原市や静岡市からも菊が運ばれてくる地域を超えた大きなイベントで、大変華やかな景色だったそうです。

菊まつりでの盆景制作はいつ始まったのでしょうか？

開園当初から、菊まつりでは菊花大会とともに菊人形の展示を行っていました。制作を依頼していた菊師が引退した後、代わりのように見せられないかと考え、作り始めたのが懸崖菊です。これも私を中心に、職員で作り方を調べ、工夫して育てています。「野田懸崖」と呼ぶ人もいます。

網で形を整えてベースを作り、ひとつのベースに12鉢の菊を這わせてペロのようにしたものを、十字に組立てて木のようにして飾ります。他にはない楽寿園オリジナルの懸崖菊なので、ぜひ注目してみてください。今年の菊はともいいですよ。

菊まつり期間の来場者数は、年間で二番多く、普段の2倍〜3倍の、月間6万人ほどの方がいらっしやいます。盆景を楽しみに、県外から毎年来てくれているお客さんもいます。備中松山城を作った時は、「備中松山城」に行ったばかりだが、本物そっくりだ」と言ってくださった方もいらっしやいました。毎年多くの方に見て喜んで頂けているのが何よりの喜びです。



平成 29 (2017) 年に制作した「小田原城」の盆景

りの企画を職員で考えたところ、建物の屋根に菊を載せるアイデアから盆景制作が始まりました。盆景は平成5年(1993)にはじまり、楽寿館を2分の1スケールで作ったのが最初です。

職員手づくりの盆景制作

盆景は、何をやるか決めることから、すべて楽寿園の職員で行っています。テーマは毎年その時に話題性のある建造物にしています。今回は大河ドラマにちなんだ鎌倉の鶴岡八幡宮です。昨年はコロナ終息を願って、奈良の東大寺でした。その前は火災に遭った首里城をつくり、復興の募金活動も行いました。

毎年恒例の夜間開園と夜の菊のライトアップも、仕事の中から生まれたものです。菊まつりの準備での残業中、ライトに照らされた菊がともきれいで、これは夜も見てもいい話になり早速翌年から始めました。

菊まつりが終わるとすぐに、来年の芽を取るための準備が始まります。今年使った菊の上の部分の切った、暖かくなる季節に出てきた芽を指し芽にするという菊ができます。

6月頃にはその年のテーマを決め、実物の図面を取り寄せ、盆景作りも始まります。1年がかりで菊を育て、建築の計画をして、菊まつりの準備が進んでいきます。

次世代につなげたい知恵と技術

菊づくりも盆景も、長年自分たちで試行錯誤しながら作ってきました。毎日畑の菊の世話をし、若いスタッフにも技術を伝え、みんな年々腕があがっています。もしチャレンジできるなら、盆景初期に作った金閣寺をもう一度作りたいです。当時はできなかった屋根を反らせる技術もあるし、経験が積んだ今なら、もっと本物そっくりにできますよ。

楽寿園、三島についての印象を教えてください。

楽寿園に勤め始めた頃は、小浜池には全然水がなく、人工的に水を溜めるか溜めないかなんていう話もあったくらいでした。ここ数年水が出るようになったことは本当に嬉しいです。一昨年の満水になった景色は、40年勤めて初めて見ました。ずっと三島に住んでいますが、やはり楽寿園が一番好きです。時代の中で、遊具が少なくなったり、森が広がったりと変化はありますが、これからもたくさんの人に愛される場所であって欲しいですね。

野田さんにとって盆景制作はどんなものですか？

私は18歳で技士として楽寿園に就職してから40年以上になります。入った当初は遊具の担当でした。普段は公園の施設や植物などの管理をしながら、菊まつりの準備をしています。

盆景制作には始めからずっと関わっています。建築の専門家ではないので、図面の引き方からすべて自分たち職員で調べて、毎年研究や改良を重ねています。実物の図面を図書館などから取り寄せ、図面と写真を照らし合わせて、人が屋根に上がって作業できるような縮尺で図面を引き、それをもとに盆景を作っていきます。重機が必要になれば職員が資格を取って作業するし、事務職員もペンキだらけになって塗っています。久能山東照宮を作った時は、極彩色の花鳥の彫刻を再現するのに、絵の得意な女性の職員が全部書き写してくれました。

いつもは7〜8人の職員での作業ですが、会期直前の菊を屋根にのせたり飾り付けるなどの追い込み作業は、約30名の楽寿園職員全員で行います。10月は開園中も園内で建築の作業をしています。

ボランティアの楽寿園応援隊のみならずにも協力してもらっています。皆さん慣れたもので、菊の配色や配置をお任せできるくらいです。

専用の畑で育てられる盆景の菊づくり

楽寿園は樹木が多い公園なので、菊を木

菊づくりは、秋麗会のみなさんに教えて頂きながら、こちらでも試行錯誤でやってきました。園内でも育てていますが、時間や場所が限られるので、市内(三島市萩)に600坪の畑をお借りして、毎日通って育てています。約千鉢のスプレー菊の栽培や、懸崖(けんがい)という、菊がペロのように垂れるような形に仕立てていく作業をそこで行っています。時季になり、花が咲いたら楽寿園に運びます。屋根にのせるスプレー菊約八千鉢は、愛知県から運んできます。

これまでの盆景制作で印象に残っていることや、苦労したことはありますか？
建築が開業の間に合わなかったことはありませんが、菊は植物なので、見頃は菊まつりに合わせるのとても難しいです。見頃が会期を外れてしまうことや、なかなか咲かずに何度もお客さんが足を運んでくださることもあります。

菊花大会の菊を展示する「菊小屋」を職員が造っていた頃、台風で完成間近の小屋が飛ばされてしまったこともあります。手塩にかけて愛好家の方が育ててきた、大切な菊も潰れてしまっってショックでした。なので、台風はいつも怖いですね。

萩の畑で育てている懸崖菊は研究を重ねています。枝が垂れたように見える菊で、伸びた枝をひとつひとつ針金で止めて垂れる形に整えていきます。この枝を垂れさせる作業はとても手間がかかり大変です。

楽寿園は樹木が多い公園なので、菊を木

三島市立公園 楽寿園 第70回菊まつり

2022年10月29日(土) ~ 11月30日(水)

三島カルチャーをつくる人びと」は、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業や三島の文化に関わる方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等。詳しくは下記のwebサイトをご覧ください。